

工学部新入生の初修外国語学習動機の分析

人間科学系 李 郁蕙、児玉 恵美、アプドゥハン 恭子

An Analysis of Freshmen's Motivation for Learning Second Foreign Language at the Faculty of Engineering

Kyushu Institute of Technology Yuhui LEE
Emi KODAMA
Kyoko APDUHAN

1. 背景と目的

九州工業大学工学部では、2015年度グローバル人材の育成に向けて外国語科目の新カリキュラムをスタートさせた。主な変更点は二つある。まず、初修外国語¹⁾の選択語種の幅を従来の中国語、ドイツ語の二言語から、フランス語、韓国語を加えた四言語に広げた。そして、英語を含む外国語履修単位を10単位から12単位に増やし、二年次では一年次に選択した言語の履修を続けるか、新設の上級英語科目を受講するか、どちらかを自由に決めることとなった。学生にとって選択肢が増えることは望ましいことだが、それを提供する側からすると、開講クラス数や時間割編成などにおける不確実性が高まり、対応しにくい面がある。また、初修外国語の担当者としては、できるだけ多くの受講生に二年次以降も継続して学習してもらいたいという期待もある。このことから、教員には学生の学習動機を的確に把握し、それに積極的に応えていく努力が必要となる。

これまでに大学生の英語学習動機に関する先行調査は、廣森・田中（2006）や鈴木・Leisら（2010）など数多く行われてきたが、第二外国語学習動機に関する調査は、いまだ少数にとどまっている。その中で例を挙げると、日本独文学会ドイツ語教育部会が全国の大学生・高専生徒を対象として実施した「初修外国語としてのドイツ語教育に関する調査」（1999）では、ドイツ語の選択理由として「ドイツ語圏に関心があるから」との回答が最も多く、次いで「将来に役に立つと思うから」、「他の外国語より楽しそうだから」の順となっている。同じくドイツ語を対象にした藤原（2010）の近畿地区12大

李 郁蕙、児玉 恵美、アブドゥハン 恭子

学における包括的な調査では、学習動機に関し、「異文化と言語への憧れと興味」、「ドイツの先進的分野に対する関心」、「ドイツ関連の仕事に就く希望」、「専門分野の文献理解の必要性」、「ドイツ語学習への消極的態度」の5因子が見出され、その中で「異文化と言語への憧れと興味」がドイツ語学習開始動機の最も重要な因子であると指摘されている。

近年では、教養教育を取り巻く環境の変化に伴い、単一大学での初修外国語科目全般に関する調査が、埼玉大学と東北大学で実施されている。そのうち、初修外国語選択科目（ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、韓国語）の履修状況を調査した埼玉大学全学教育・学生支援機構全学教育企画室（2008）の調査では、これまでに何らかの初修外国語を学んだ経験のある学生はない学生に比べ、初修外国語を学ぶことに対し、より内発的な興味を強く抱いており、さらに専門の勉強にも必要だと感じていることが示されている。また、東北大学高等教育開発推進センター（2012）の調査では、初修外国語選択必修科目（ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語）の選択理由が「その言語を使っている国の文化や歴史に興味があるから」、「働く上で役立つ言語だと思うから」、「政治・経済的に重視されている国の言語だから」の順に多いことが明らかにされている。

以上の先行研究では、大学生が初修外国語科目を選択するにあたって自分自身の興味や関心を最優先するという結果が共通して得られている。ただし、理工系の学生に注目すると、日本独文学会ドイツ語教育部会（1999）では、工学・理学系学生の回答で履修希望の理由として最も多いのは全体一位の「ドイツ語圏に関心があるから」ではなく全体二位の「将来に役立つと思うから」だとしている²⁾。また、藤原（2010）も、理工系の学生は「ドイツ語学習への消極的態度」が人文系の学生に比べて有意に高く、つまりドイツ語学習に対して消極的な傾向が見られると指摘している³⁾。さらに、埼玉大学全学教育・学生支援機構全学教育企画室（2008）の調査では、工学部が全学部の中で「通年の授業であるため履修登録しにくい」や「興味がない」といった初修外国語科目への履修障害を最も抱えていることが報告されている。つまり、いわゆる理工系の学生は、初修外国語科目を選択する際必ずしも人文系の学生と同じように自分自身の興味関心を基準としていない。もっといえば、そもそも外国語学習に対する興味関心自体が比較的低いとされる場合が多い。これは、人文分野に属するという初修外国語科目の性格に関連していることが推測される。

ところで、東北大学高等教育開発推進センターによる2012年の調査当時、初修外国語科目の受講人数は多い順から中国語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、朝鮮語、ロシア語となっている。そして、その選択理由は所属学部や性別の影響が一部あるものの、基本的に語種に依存するとされている。すなわち、中国語は「政治・経済的に重視されている国の言語だから」、「働く上で役立つ言語だと思うから」、ドイツ語は「その言語を使っている国の文化や歴史に興味があるから」、「専門分野の研究を行うのに必要だと思うから」、スペイン語は「その言語を使っている国の文化や歴史に興味があるから」、「先輩や友人に勧められて」、フランス語とロシア語は「その言語を使っている国の文化や歴史に興味があるから」、「その外国語を使っている人と交流したい」、朝鮮語は「その言語を使っている国の文化や歴史に興味があるから」、「楽に単位が取れそうだったから」と、語種それぞれに上位を占める理由が異なる。ドイツ語、フランス語、スペイン語、朝鮮語、ロシア語の5言語ではいずれも文化や歴史への興味がトップに挙げられているのに対し、中国語では政治力や経済力を重視するという理由が圧倒的に多い。ただし、この調査は事前に用意された選択肢の中から当てはまるものを複数回答する方式で実施したもので、学生の意見を幅広く正確に反映しているとは言い難い。

冒頭でも述べたように、本研究の出発点は工学部の新しい教育課題に対応することにある。そのため本研究では、工学部の学生の生の声をできるだけ幅広く集めるために、自由記述式の質問紙を用いることにした。なお、調査時期について、上記の日本独文学会ドイツ語教育部会（1999）は2月、藤原（2010）は4月下旬から5月中旬、埼玉大学全学教育・学生支援機構全学教育企画室（2008）は12月、東北大学高等教育開発推進センター（2012）は12月にそれぞれ実施されているが、本研究は4月の入学直後の新入生オリエンテーションが行われる日程に合わせて設定した。これは、履修後の様々な要因に左右されない学習開始前の純粋な学習動機を確認することを目的としている。

2. 方法

調査対象：工学部の大学一年生530名を調査対象とした。そのうち今回検討を行う項目において未記入のあった13名分を除いた有効回答者数は、全体の97.5%である517名（男性451名、女性66名）、平均年齢は男性18.32歳（ $SD = 0.67$ ）、女性18.29歳（ $SD = 0.49$ ）であった。

李 郁蕙、児玉 恵美、アブドゥハン 恭子

調査内容：ドイツ語、中国語、フランス語、韓国語のうち、どの言語を履修希望するかについて第一希望から第四希望まで尋ね、各々の希望理由を自由記述で回答してもらった。

手続き：入学時オリエンテーションにおいて、全員に質問紙調査を配布しその場で調査を実施した。すぐに答えられない学生には持ち帰ってもらい、後日回収した。

調査時期：2015年4月

3. 結果

得られた回答のうち、今回は第一希望の言語選択およびその理由を検討項目とした。

(1) 第一希望言語の調査結果

第一希望として選択した言語は、多い順から中国語275名（53.2%）、ドイツ語149名（28.8%）、フランス語54名（10.4%）、韓国語39名（7.5%）であった（図1）。

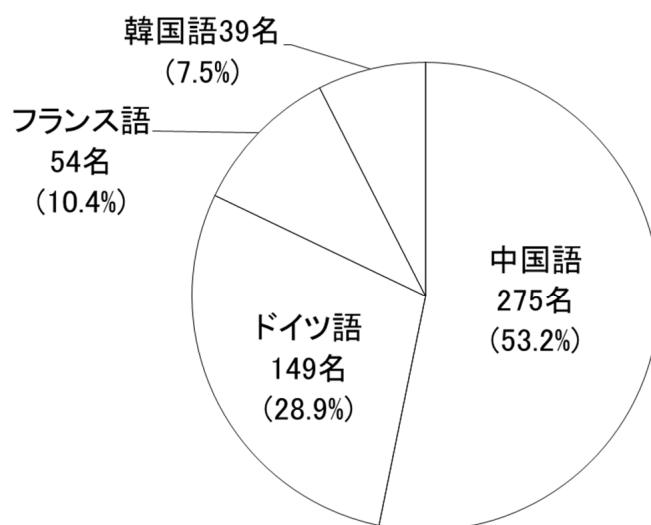


図1 第一希望言語の内訳

(2) KJ法による希望理由の検討

希望理由に関する自由記述の分析にはKJ法（川喜田、1967）を用いた。KJ法は得られたデータを意味単位に区切り、類似すると思われるものを予見なく集めて共通する名前をつけ、次にそのグループの名前の類似するものをまとめることを繰り返し、ボトム

アップの方法でデータの特徴を明らかにするものである。

このKJ法に基づき、517名分の第一希望の理由について、記述内容を全て書き出し意味単位ごとに区切ると、合計653個の回答が得られた。筆者ら3名が、内容の上で互いに類似したものを集めて分類し、意見が一致しなかったものについてはその都度合議の上、決定した。まず最初に61個の小グループにまとめられた。続けてその各小グループを言い表す言葉で名前付けを行い、〈使用機会の多さ〉、〈専門や仕事の関係〉、〈有用性〉、〈将来の必要性〉、〈現地で使う〉、〈興味・関心がある〉、〈訪問願望〉、〈国力の強さ〉、〈日本との関係〉、〈学びやすさ〉、〈良いイメージ〉、〈周囲からの影響〉、〈その他〉の13個の中グループに分類した。そして最終的に【実用目的】、【個人的関心】、【国際情勢】、【言語の特性】、【周囲からの影響】、【その他】の6個の大グループに分類された(表1)。なお、表は出現数の高いものから順に記載し、大グループ、中グループの見出の下に記載してある数値は記述数を表す(以下文中では、大グループを【】、中グループを〈〉、小グループを〔〕で記載する)。

表1 希望理由の分類結果

大グループ	中グループ	小グループ	記述数	第一希望の選択言語別記述数			
				ドイツ語 (N=190)	中国語 (N=361)	フランス語 (N=58)	韓国語 (N=44)
実用目的 259	使用機会の多さ 87	話者人口が多い	54		52	2	
		使用エリアが広い	17	2	5	10	
		来日者が多い	14		11		3
		日本での雇用が増えている	1		1		
		アルバイトで話せると便利だ	1		1		
	専門や仕事との関連 70	工業国	18	18			
		理工系言語	18	17	1		
		仕事に役立つ	13	1	12		
		日本企業の進出	8		8		
		国際社会で活躍するため	6		5	1	
		研究論文のため	5	5			
		勉強内容を生かせそうだ	1	1			
		その国に技術を伝えたい	1		1		
	有用性 58	一番使いそう	57	6	47	3	1
		観光の分野などで最も有用だ	1	1			
	将来の必要性 27	将来必要になりそう	27	1	26		
	現地で使う 17	留学のため	6	3	1	2	
		行く可能性	5	1	1		3
		旅行に役立つ	4	3	1		
		その国で働くため	2	2			

李 郁蕙、児玉 恵美、アプドゥハン 恭子

大グループ	中グループ	小グループ	記述数	第一希望の選択言語別記述数			
				ドイツ語 (N=190)	中国語 (N=361)	フランス語 (N=58)	韓国語 (N=44)
個人的関心 136	興味・関心がある 103	言語への興味	38	19	8	11	
		文化、歴史への興味	18	7	4	4	3
		国への興味	18	13	1	1	3
		専門技術への興味	15	12	1	2	
		好きだから	14	7	4	1	2
	訪問願望 33	行ってみたい	29	18	3	7	1
		交流したい	4	2	2		
国際情勢 135	国力の強さ 74	発展が目覚ましい国	30		30		
		国の経済成長	27		27		
		国の影響力の大きさ	11		11		
		市場の大きさ	6		6		
	日本との関係 61	日本に近い	40		27		13
		日本との関わりが深い	14	4	9	1	
		国交問題がある	5		4	1	
	隣国関係に学ぶべきところが多い	1	1				
	日本と考え方が似ている	1	1				
言語の特性 93	学びやすさ 77	簡単そう	20	4	10	1	5
		日本語との類似	28	1	23		4
		英語との類似	18	17	1		
		なじみがある言語	4	1	1	1	1
		漢文の学習経験	4	1	3		
		既習	3		3		
	良いイメージ 16	おもしろそう	5	2		3	
		かっこいい	3	3			
		楽しそう	3	2	1		
		美しい	2			2	
		あこがれ	1		1		
		高級感を感じる	1	1			
		メジャーだと思う	1	1			
周囲からの影響 28	周囲からの影響 28	親族、知り合いの存在	16	6	4	3	3
		他人に勧められた	6	4	1	1	
		メディアの影響	3		2		1
		行ったことがある	1		1		
		本によく出てくる	1	1			
		アニメに出てくるため	1	0	0	1	0
その他 2	なんとなく 2	なんとなく	2	1	0	0	1
合計			653	190	361	58	44

初修外国語の履修希望の理由を大グループで見ると、【実用目的】が全体の回答数の39.7%と最も多く、続いて【個人的関心】(20.8%)、【国際情勢】(20.7%)、【言語

工学部新入生の初修外国語学習動機の分析

の特性】(14.2%)、【周囲からの影響】(4.3%)、【その他】(0.3%)の順であった(図2)。

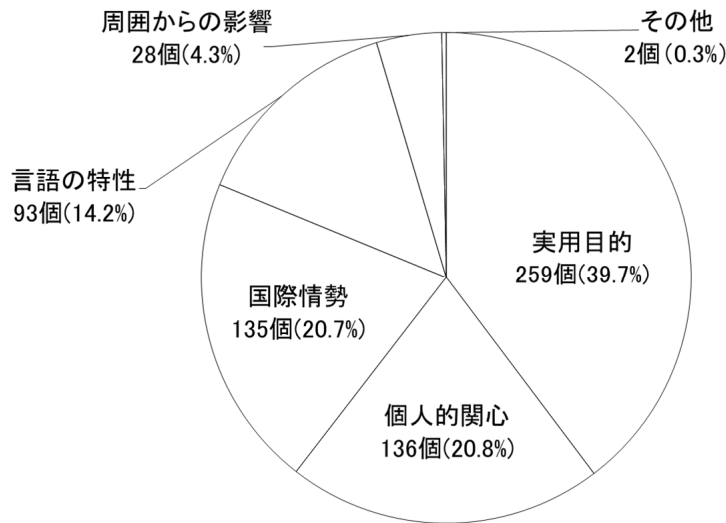


図2 大グループの構成

(3) 言語別の傾向検討

各言語における履修希望理由の違いを比較するために、言語別での大グループの内訳を図3に示す。

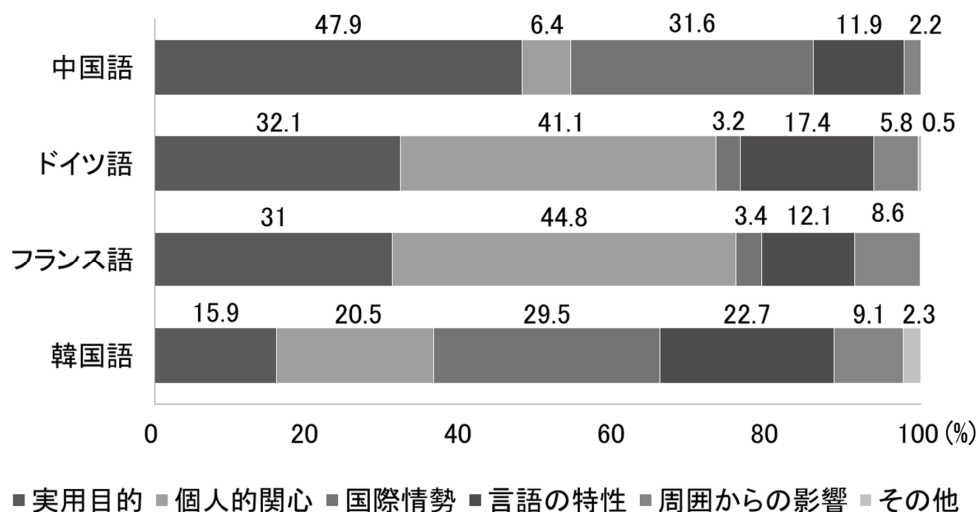


図3 大グループの言語別内訳

李 郁蕙、児玉 恵美、アブドゥハン 恭子

中国語では、【実用目的】が最も多く半数近くを占め、次いで【国際情勢】であった。それに対して、ドイツ語やフランス語のヨーロッパの言語は【個人的関心】が最も多い結果であった。韓国語を選択した学生は一割に満たなかったが、その希望動機は【国際情勢】、【言語の特性】、【個人的関心】の順でいずれも20%以上を示していた。また、【国際情勢】は韓国語で一位、中国語では二位の希望理由として挙げられていた。

ただし、同じ大グループでも、そこに含まれる中グループとの関係を各言語によって比較すると、各言語での希望する理由において具体的に重視する部分が異なっていた。特に【実用目的】では、言語による違いが顕著であり、中国語を希望する場合は〈使用機会の多さ〉や〈有用性〉を理由として記述した学生が多いのに対し、ドイツ語の場合は、〈仕事や専門との関連〉に集中していた。フランス語では〈使用機会の多さ〉の記述が多く見られた(図4-1)。

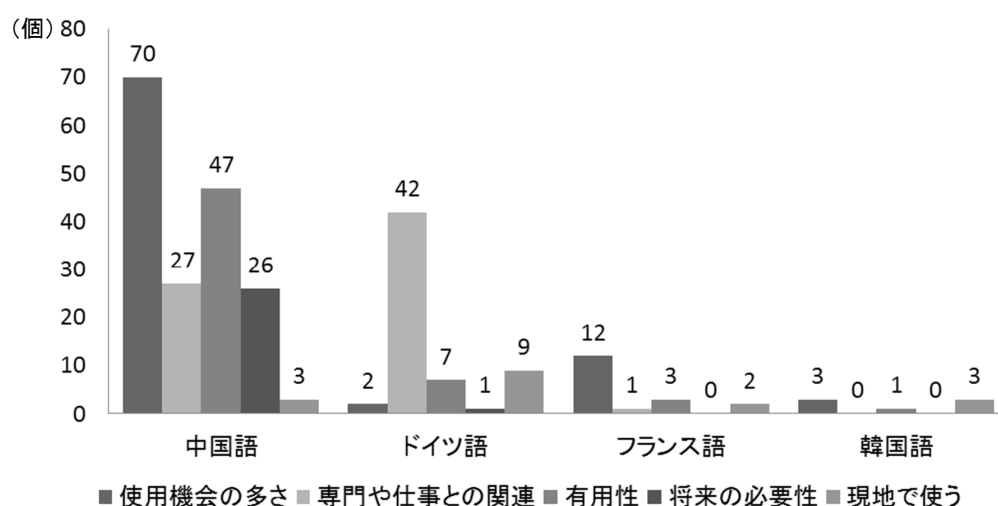


図4-1 【実用目的】に含まれる言語別の中グループ内訳

工学部新入生の初修外国語学習動機の分析

一方、【個人的関心】はどの言語も〈興味・関心がある〉、〈訪問願望〉の順となっており、同様の結果であった（図4-2）。

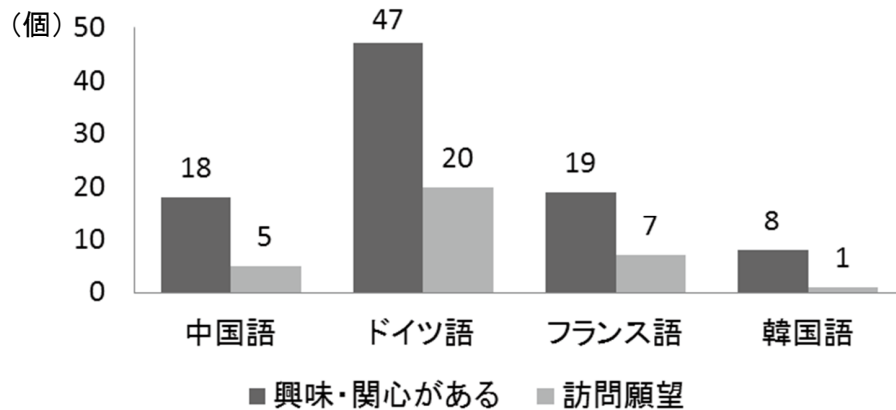


図4-2 【個人的関心】に含まれる言語別の中グループ内訳

また、【国際情勢】では、〈国力の強さ〉に言及されていたのは中国語のみであった。他方ドイツ語、フランス語、韓国語を選択した学生は、その国と〈日本との関係〉をより重要視していることが分かった（図4-3）。

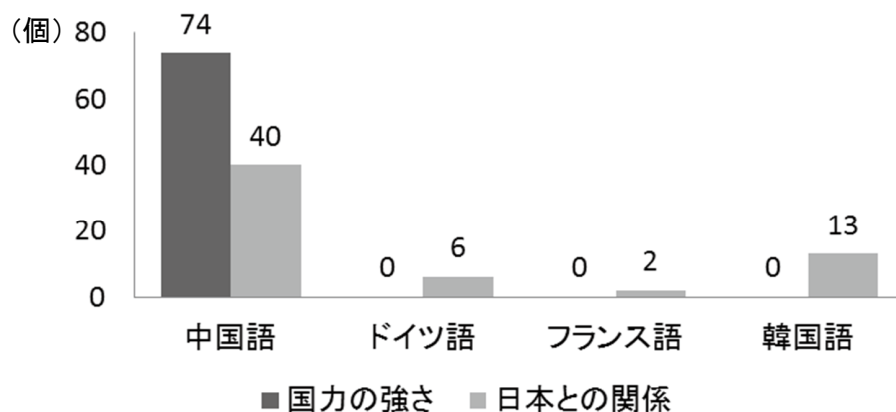


図4-3 【国際情勢】に含まれる言語別の中グループ内訳

李 郁蕙、児玉 恵美、アプドゥハン 恭子

【言語の特性】においては、他の言語に比べ中国語では圧倒的に〈学びやすさ〉が多くを占め、他方フランス語では、〈良いイメージ〉の記述の方が〈学びやすさ〉を上回っていた（図4-4）。

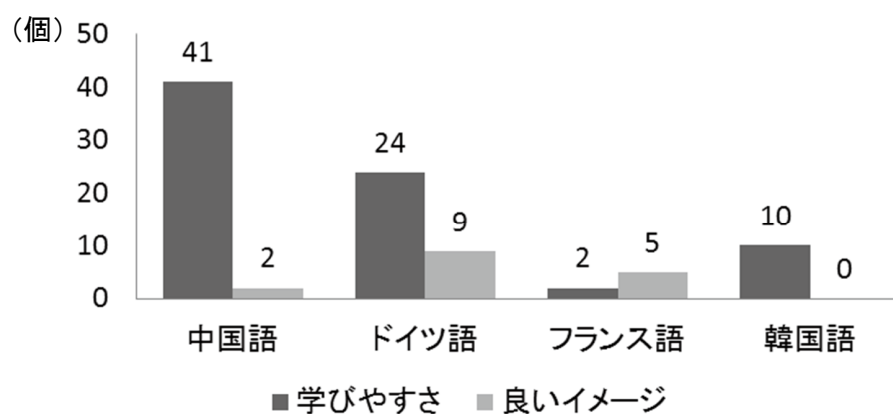


図4-4 【言語の特性】に含まれる言語別の中グループ内訳

【周囲からの影響】はドイツ語で多く挙げられていた（図4-5）。

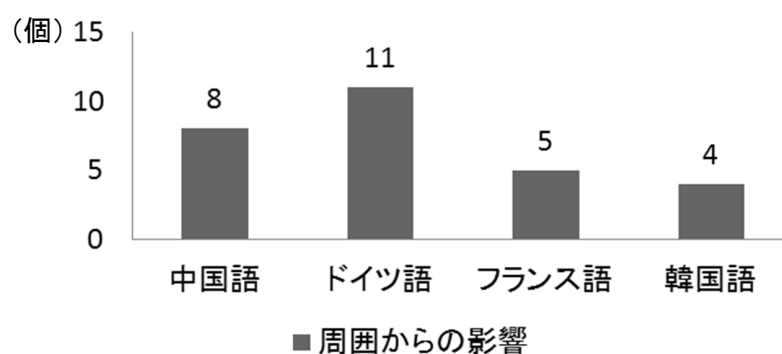


図4-5 【周囲からの影響】に含まれる言語別の中グループ内訳

4. 考察

履修希望の言語選択において、517名の学生のうち半数以上が中国語を選択しており、これは東北大学高等教育開発推進センター（2012）の調査とほぼ同様の動向を示す結果であった。よってこの動向は、近年の大学における外国語履修選択の一つの傾向を表すものと言えるだろう。また本研究では、初修外国語の履修動機として【実用目的】、【個人的関心】、【国際情勢】、【言語の特性】、【周囲からの影響】、【その他】の六つの大きな要因が見出された。このうち【言語の特性】は、今回学生の意見を詳細に拾い検討することで新たに抽出することができた動機として注目に値する。その上、各々の要因について、そこに含まれるグループの構成や言語別の特徴などを個々の意見から具体的に知ることができたことが大きな成果であった。以下、言語別に考察する。

(1) 中国語について

中国語を希望した学生の選択理由は大グループ【実用目的】に集中しているが、中でも中グループの〈使用機会の多さ〉や〈有用性〉、それに次いで〈専門や仕事との関連〉、〈将来の必要性〉が多く占めていた。特に〈使用機会の多さ〉では小グループの〔話者人口が多い〕が圧倒的多数であり、その他では〔仕事に役立つ〕、〔一番使いそう〕、〔将来必要になりそう〕などの記述数の多さが目立つことから、学生が中国語を希望する際には、中国語を話す人と将来実際に意思疎通を行う可能性を想定してそれに備えたいと考えていることが推測される。次に多い【国際情勢】では、〈国力の強さ〉が注目され、具体的にいえば〔国の経済成長〕や〔発展が目覚ましい〕などの記述が多く見られた。今後の国力により、履修希望者の人数に変動が予想される。また、【言語の特性】としては、〔日本語との類似〕や〔簡単そう〕が多く挙げられている。これは、日本語と同じく漢字を使い、正確な発音を知らなくても意味がある程度推測できるからと考えられる。以上のことから、中国語を指導する上で、漢字の影響で発音が疎かにされないように実践的な会話力を鍛え、有用性を実感させることが授業の重点目標になると言える。

(2) ドイツ語について

ドイツ語の希望理由は、【個人的関心】が最も多く、これは先述した日本独文学会ドイツ語教育部会（1999）の工学・理学系学生を対象とした調査とは異なった結果であった。そのうち〔言語への興味〕、〔国への興味〕についての記述も多かったが、具体的に

李 郁蕙、児玉 恵美、アブドゥハン 恭子

は「大手自動車メーカーが多い」や「自然エネルギー拡大の模範となる国」などといった〔専門技術への興味〕についての言及も多くみられた。次に多い【実用目的】を見ると〈専門や仕事との関連〉のうち、具体的には「工業大国だから」や「かつて科学分野の共通語として用いられていたから」といった〔工業国〕、〔理工系言語〕に関する記述が多くみられた。よって、ドイツに先進国としてのイメージが定着していると同時に、理工系の学生ならドイツ語を習うべきという意識の存在がうかがわれる。【言語の特性】として多く占めているのは、〈学びやすさ〉であり〔英語との類似〕である。なお、【周囲からの影響】は他の言語と比べドイツ語の希望理由としてより多く見られ、〔親族・知り合いの存在〕、具体的に、ドイツ在住経験を持つ親族や、ドイツ語を専攻とする友人などの影響について言及されている。以上のことから、ドイツ語を指導する上では、個人的な関心に応え、専門技術に関する情報も提供できる授業設計を行うことが望ましいと考えられる。

(3) フランス語について

フランス語の希望理由は【個人的関心】が最も多く、その中でも〈興味・関心がある〉の〔言語への興味〕への記述が多く見られることが特徴として挙げられる。続く【実用目的】の中では〈使用機会の多さ〉のうち〔使用エリアが広い〕という理由が多いことから、フランス語も中国語と同じく使用機会を想定して選んでいると考えられる。また、【言語の特性】を見るとフランス語は他の言語と異なり、〔おもしろそう〕〔美しい〕などの〈良いイメージ〉が〈学びやすさ〉に勝っていた。このようにフランス語に関しては、言語そのものに対し良いイメージであり、興味を持たれていることが特徴と言える。ドイツ語同様、フランス語においても〈興味・関心がある〉が高く、これは東北大学高等教育開発推進センター（2012）の調査結果を支持するものであった。以上のことから、フランス語を指導する上で、幅広いフランス語使用の国々も意識しながら、学ぶ楽しさを与えることが重要である。

(4) 韓国語について

韓国語の希望理由は、【国際情勢】が最も多く、その中で全てが〈日本との関係〉のうち〔日本に近い〕という理由であった。よって韓国語を履修希望する学生にとっては、その国が隣国で身近な存在であることが最も大事であることが分かるが、そうでありな

がらも同時に【実用目的】はそれほど重視されていないことから、使用機会が限定的と考えられていることが特徴だろう。続いて【言語の特性】では、〔簡単そう〕、〔日本語との類似〕のため〈学びやすさ〉が多く挙げられている。これは、日本語と文法や語順が似ているという認識を持たれているからと考えられる。以上のことから、韓国語は、学生の抱えている親近感を活性化させつつ学習を進める工夫が求められる。

5. 今後の課題

今後も引き続き同じ対象者で縦断的に調査し、成績や二年次以降の学習継続意思や動機との関連を分析して、教育活動へフィードバックしていきたい。また、今回の調査結果から学習動機を調査するために必要な項目を選定し、次年度以降の大学一年生の初修外国語の選択とその理由の動向についても継続して調査を行う予定である。ただし今回の調査では第一希望の言語の学習動機の分析に留まっており、履修希望人数の偏りからフランス語や韓国語を学習したい動機が十分に把握できたとは言えない。第二希望以下の自由記述内容を検討して今後の調査項目に加えることも必要であろう。

注

- 1) 大学の初年次から実施される外国語の入門からの科目で、英語に次ぐ「第二外国語」、「初習外国語」とも言われる。
- 2) 日本独文学会ドイツ語教育部会（1999）では、工学・理学系は工学・農水産系と自然科学・理学系を合わせたものである。
- 3) 藤原（2010）における理工系は理工学部、情報学部、農学部、海事科学部が含まれている。

李 郁蕙、児玉 恵美、アブドゥハン 恭子

引用文献

廣森友人・田中博晃（2006）「英語学習における動機づけを高める授業実践：自己決定理論の視点から」
『Language Education & Technology』43、pp.111-126

鈴木渉・Adrian Leis・安藤明伸・板垣信哉（2010）「日本人大学生の英語学習に対する動機づけ調査：
Dörnyei の L2 motivational self system に基づいて」『宮城教育大学国際理解教育研究センター年
報』6、pp.34-43

日本独文学会ドイツ語教育部会（1999）『ドイツ語教育の現状と課題：アンケート結果から改善の道を探る』

藤原三枝子（2010）「大学におけるドイツ語の学習開始動機に関する量的研究：ドイツ語の学習理由、学習理由と授業内容への期待との関係性」『ドイツ語教育』15、pp.4-19

埼玉大学全学教育・学生支援機構全学教育企画室（2008）『初修外国語に関する学生調査結果報告書』

東北大学高等教育開発推進センター（2012）『東北大学の初修外国語教育』

川喜田二郎（1967）『発想法：創造性開発のために』中公新書

補記

本稿は、既発表論文が査読を経て新たに掲載されるものである。（2017年2月2日）